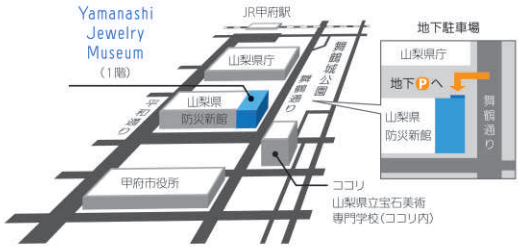
Introduction of works

【ブローチ】

藤島 和廣

中心にオパールを配置し、周りを複雑な曲線でロウ付けしており、裏側も細かな曲線が多く施されている。実際に着ける人にしか分からない箇所まで丁寧に作り上げられるのは、デザインも自分でこなす藤島ならではである。
面ではなく線でボリュームを出すことを意識しているため、見た目の重厚感とは異なり、実際に手に取るとその軽さに驚く。まさに、着ける人のことを思って制作されたブローチだと言える。
ここまで細かく複雑な線を組み合わせて作品を作ったのは、制作当時の自分の技術を確認するためで、今でも後悔のない自身の代表作になったという。

［サイズ］ 各　縦 約50mm × 横 約35mm
［素　材］ K18・Pt.900・オパール・ダイヤモンド



山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1−6−1　山梨県防災新館1階
https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/
開館時間：10:00〜17:30（最終入館17:00）
休　館　日：火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、その他、臨時に開館・休館することがあります。
入　館　料：無　料
駐　車　場：92台　山梨県防災新館地下有料駐車場
（来館者は1時間無料）

貴金属加工職人

藤島 和廣

craftsman jewelry file.24
kazuhiro fujishima
2021 September

craftsman jewelry

Vol.24

2021年9月発行

山梨ジュエリーミュージアム発行

楽しむことが挑戦につながる

慣れ親しんだ場所で育った感覚

藤島の工房は、かつて貴金属加工職人として働いていた父親の工房を引き継いだものだ。そのため、藤島にとって、小さい頃から遊び場の一つだった。学校から帰ってきては、住み込みで働いている職人の技を見たり、作品を触ったり、時には一緒に遊んだりしていた。高校生になると、見よう見まねで作品を作ったこともあった。

当然のようにこの世界に入ると思って育った藤島は、高校卒業後に父親の工房に入り、以前から仲の良かった兄弟子に指南を受けた。新入りとして入ったものの、小さい頃から遊びながら制作していたため既に基礎を知っていた藤島は飲み込みが早かった。

工房に入り年数を重ねていくと、当然、プロとして求められるものも多くなり、その一つがデザインだった。専門的に学んだわけではない藤島は20代後半の時、山梨県研磨工業指導所（現：山梨県産業技術センター）でデザインの基礎を勉強した。山梨県研磨工業指導所での指導は月に1回だったが、そこではデザインの他にも、彫金などの技術的な手法について深い知識を得ることができた。

手作りへのこだわり

デザインの知識も増え始めた30代後半は、バブル絶頂期で、モノを作れば売れていた時代。職人の形態も変化しつつあった。磨きだけを行う職人のように、特定の工程のみを専門で行う職人が出てきたのだ。

だが、小さい頃から遊びとして貴金属加工に親しんでいた藤島は仕事に対する好奇心が旺盛だったため、一つを極めるのではなく、すべてを極めたいという思いがあった。そのため、それぞれの工程でも専業の職人以上に技を磨いた。

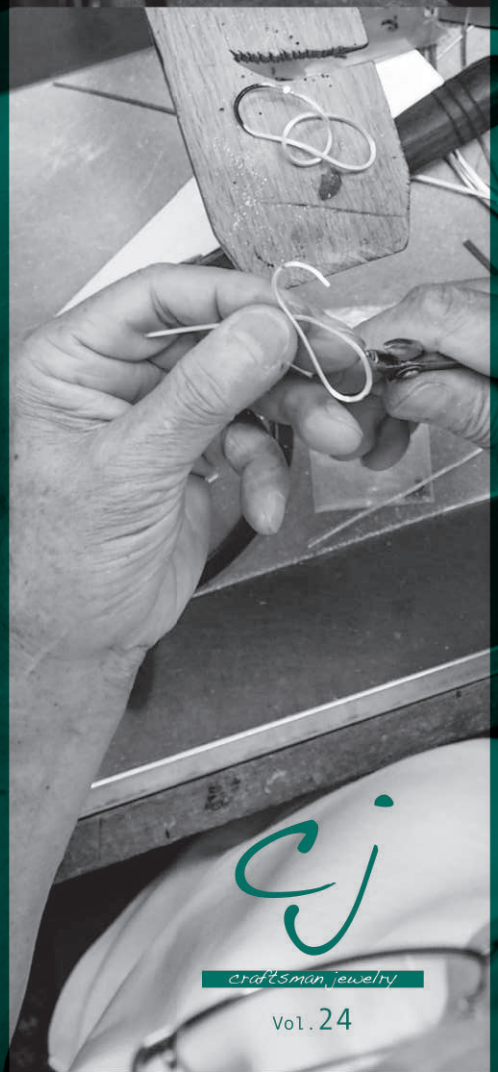
制作するジュエリーの素材も、当時メインで使用していたK18やPt.900の他にも貴石、半貴石、真珠など幅広く挑戦した。そして、プロとしてあらゆる技法を用い幅広い作品を作りたいと思っていた藤島は、常に手作りにこだわった。

バブル崩壊後、ジュエリー業界も大きな打撃を受けたものの、貪欲に技術を磨いていた藤島はその腕前を買われて堅実に仕事を続けた。

藤島 和廣（ふじしま かずひろ）

貴金属加工職人
山梨県貴金属工芸協同組合 審査コンテスト 山梨県知事賞

ジュエリー工房藤島
甲府市丸の内3丁目32-27
Tel:055-228-0356



craftsman jewelry
Vol.24

挑戦することへの好奇心

すべてを極めたいと思っていたのは、仕事が楽しかったからだ。他の職人に断られた依頼が自分にくると、やってやろうと心がワクワクする。出来なかったらどうしようと思うこともあるが、挑戦する楽しみや取り組む好奇心の方が優先される。

依頼の内容を聞くとすぐに作品の大まかなイメージを膨らませる。そのイメージしたものを実際に作っても、一度で成功することはなく大抵失敗する。何度も失敗と試行錯誤を繰り返し、完成に近づけていく。そして、そのミッションをクリアすると、さらに上のミッションに挑戦したいという欲が出てくるのだ。

この仕事は生産性を求めていたらやるべきではないというのが藤島の考えにはある。生産性を求めたら自分のやりたい仕事ができない、楽しくない、挑戦できないからつまらない。だからこそ、今の若者にも生産性は考えず、まずは楽しんで挑戦し続けてほしいと願っている。

藤島の代表作には、線を使って動きをつけるものが多い。もともと好きだった手法だが、線を流動的に表すことによってボリュームを出している。そして、見えないところにも細かな線が多く施されている。

藤島は、見えないからこそ細部まで丁寧に作るという。身に着ける人を第一に考え、すべて自身で作りあげる藤島の心意気の一つである。

生涯現役

藤島は生涯好奇心を失わずに仕事を続けていきたいという。自身は何かを楽しむことが得意であり、工房には趣味で制作しているカヌーが置かれている。仕事の合間を縫ってコツコツと作っており、完成まであと少しだという。また、子供の頃クラブに入って始めたフィギュアスケートも続けており、全日本スケート連盟の指導員として初心者の指導も行っている。ここまで長く続けられるのは、楽しみながらしてきたからに他ならない。

仕事も同様に楽しみながらすることでひらめきが出てくる、楽しいから新たな可能性が生まれるものだという。

今後は、若者との接点を求め自身の技術を伝えていきたいと思うと同時に、若者から刺激を受けて新たな学びを得たいと考えている。

また、加工とデザインを両立させているからこそ好きな作品が制作できるという自身の強みを活かし、日常生活での何気ない会話などからヒントを得て、新たな作品を作り続けていきたいとも考えている。

師事した父親からは、「金なんか後からついてくる、楽しく仕事をしていれば自然と上達し、気づいたときに収入が得られるものだ」と言われたという。

まさにそのとおりだと感じている藤島は、今も新たな挑戦を探し求め、制作意欲を高めながら作業に取り組んでいる。